



営農タイムリー！



発生予察情報について(10月)

2024年9月27日発行

病害虫発生予報第8号(10月)

京都府病害虫防除所より、10月の予察情報が発表されました。

病害虫発生予察第8号(10月) (抜粋)

予報の概要

作物名	病害虫名	予想発生量 〈平年比(前年比)〉
イネ	トビイロウンカ	並
アブラナ科野菜	べと病 白斑病 黒斑病・黒斑細菌病	並(並) 並(並) <u>やや多</u> (やや多)
	コナガ ハイマダラノメイガ	<u>やや多</u> (やや多) <u>やや多</u> (やや多)
野菜類全般	ハスモンヨトウ ハモグリバエ類 シロイチモジヨトウ タバコガ類	<u>やや多</u> (やや多) やや少(並) <u>やや多</u> (多) <u>やや多</u>
キャベツ	菌核病	並(並)
ホウレンソウ	シロオビノメイガ	<u>多</u> (やや多)
ネギ	ネギハモグリバエ類 ネギアザミウマ	やや少(並) やや少(少)

イネ

1. 晩生水稲 トビイロウンカ

予報内容 発生量 : 平年並

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると坪枯れ等の被害を起こす。
- (2) 9～10月の気温が高いと増殖に好適である。
- (3) 低湿田、通風不良田、多肥田等では発生しやすいので注意する。



成虫



幼虫



被害水田

野菜

1. アブラナ科野菜 ベと病

予報内容 発生量 : 平年並 (前年並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) **キャベツ**をはじめ、**ハクサイ**、**ダイコン**などの各種**アブラナ科野菜**で発生し、**アブラナ科野菜**を連作した場合に発生が多くなる。
- (2) 気温が低く降雨が続く秋から初冬及び春先に発生が多い。
- (3) 肥切れすると発生しやすいので、肥培管理に注意する。



ハクサイ

2. アブラナ科野菜 白斑病

予報内容 発生量 : 平年並 (前年並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 雨の多い年は、初秋から晩秋にかけて発生が多い。
- (2) 強風雨や泥のはね上げは、本病の伝染、まん延を助長する。
- (3) 肥切れすると発病を助長するので、追肥を早めに行う。
- (4) 多湿条件で発生しやすいので、ほ場の排水を良好にする。



ハクサイ

3. アブラナ科野菜 黒斑病・黒斑細菌病

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い (前年比 やや多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 害虫の食痕や風雨による傷口等は細菌の侵入を容易にし、発生を助長する。
- (2) 降雨日数と発生量との相関が高い。
- (3) 台風等による強い降雨の後や害虫の食害が目立つ場合は、早期防除に努める。



ハクサイ



4. アブラナ科野菜 コナガ

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い (前年比 やや多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 防虫ネットを利用し、物理的防除に努める。
- (2) 発生回数が多く(10~12回/年)、各発育段階(卵、幼虫、蛹、成虫)が同時期に混在する。



5. アブラナ科野菜 ハイマダラノメイガ [ダイコンシンクイムシ]

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い (前年比 やや多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 生育初期に加害されると欠株等が生じ、大きな被害になるので注意する。
- (2) 株の生長点部を食害するため、被害株は生育が停止し、枯死する場合がある。
- (3) は種直後から防虫ネット等で被覆を行い、産卵を防ぐ。
- (4) ほ場を見回り、生長点付近の発生に特に注意して観察し、発生を認めた場合は、直ちに防除する。



幼虫



6. 野菜類全般 ハスモンヨトウ

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い (前年比 やや多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 齢が進んだ幼虫は周囲に分散し、かつ、薬剤の効果が著しく低下するので、若齢幼虫期の防除が重要である。



卵



ふ化幼虫



幼虫

老齢幼虫



蛹



成虫

7. 野菜類全般 ハモグリバエ類

予報内容 発生量 : 平年比 やや少ない (前年並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) シュンギク、コマツナ等軟弱野菜は、被覆資材を用いた物理的防除に努める。
- (2) 幼虫は葉の中に潜り込み食害するが、その期間は3日程度と非常に短いので、薬剤を散布する場合は、発生確認後速やかに行い防除時期を逸しないようにする。
- (3) 施設マルチ栽培では、マルチ上に落ちた蛹を掃き集めて処分する。

8. 野菜類全般 シロイチモジヨトウ

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い (前年比 多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 本種は齢が進むと、薬剤の効力が低下するので、ほ場をこまめに観察して早期発見に努め、若齢期の防除を徹底する。
- (2) 被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (3) 本種は寄主範囲が広く、ネギ以外に豆類、野菜類、花き類を加害するので注意する。



卵



幼虫



蛹



成虫

9. 野菜類全般 タバコガ類 [オオタバコガ、タバコガ]

予報内容 発生量 : 平年比 やや多い

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が食入している**トマト**、**ナス**、**トウガラシ**等の果実は処分する。
- (2) 幼虫が果実等に食入したり、また幼虫の齢が進むと防除効果が低下するので、早期発見に努め、食入前及び若齢期に防除する。
- (3) **オオタバコガ**は**ナス科**、**マメ類**、**アブラナ科野菜**等広範囲の野菜、**タバコガ**は**ナス科野菜**を主に加害するとされている。

オオタバコガ



10. キャベツ 菌核病

予報内容 発生量 : 平年並 (前年並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 発生終期に菌核が形成され、土中に落ち、次作以降の伝染源となる。菌核は土壌中で2～3年間生存する。
- (2) 適温は20℃前後で、曇雨天が続いた時に発生しやすくなる。
- (3) 発病株は菌核を形成するまでに抜き取り、処分する。

11. ホウレンソウ シロオビノメイガ

予報内容 発生量 : 平年比 多い (前年比 やや多い)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 秋期の気温が高く、雨が少ないと発生が多くなる。特に、雨よけ栽培の場合、降雨に関係なく急速に増殖することがある。
- (2) 早期発見に努め、若齢幼虫期の防除に留意する。



幼虫



成虫



被害株

12. ネギ ネギハモグリバエ

予報内容 発生量 : 平年比 やや少ない (前年並)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。
- (2) 産卵から羽化までの発育所要日数は20℃で約36日、25℃で約23日程度である。
- (3) 被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (4) 1葉あたり1～数匹の幼虫が加害する
バイオタイプA(従来系統)とは異なり、
10匹以上の幼虫で集中的に加害し、
葉を白化させるバイオタイプB(別系統)
の発生を確認しているので注意する。



幼虫

成虫



13. ネギ ネギアザミウマ

予報内容 発生量 : 平年比 やや少ない (前年比 少ない)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間、10世代以上くり返し、葉の表層を食害し、かすり状の食害痕を残す。**ネギ**では葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- (2) 本種はアイリス黄斑ウイルス (Iris yellow spot virus : IYSV) による病害で**ネギえそ条斑病**を媒介する。
- (3) 薬剤散布の他、**赤色系防虫ネット**や**UV カットフィルム**による**物理的防除**が効果的である。
- (4) 被害葉及び収穫残さが本虫の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (5) 本種は、殺虫剤感受性低下が懸念されている。殺虫剤散布後は効果を十分に確認し、感受性の低下が疑われる場合は系統の異なる薬剤を散布する。また、感受性の低下を避けるため、系統の異なる殺虫剤をローテーション散布する。



幼虫



成虫



今後注意すべきその他の病害虫等

野菜

1. 軟腐病（キャベツ、ハクサイ、カブなど）

ほ場の排水に努め、雨水が停滞しないようにする。施肥は、窒素過多にならないよう注意する。

台風等の風雨による傷や泥のはね上げにより発病が助長される。また、**キスジノミハムシ**、**コオロギ**等食葉性害虫の食害痕から細菌が侵入して発病することが多いので、強い降雨の後や害虫の被害が目立つ場合は、早期防除に努める。



2. ネギベと病

9月下旬以降、平均気温が15～20℃で降雨が多くなると、ほ場にすき込まれた罹病残さ等に潜伏している病原菌の活動が再び活発となるので、本病の発生には十分注意する。



3. キュウリ 退緑黄化病、キュウリ 黄化病、キュウリ黄化えそ病、CABYV

いずれもウイルスによる病害で、**退緑黄化病**及び**黄化病**では葉に退緑及び黄化症状を示して減収し、**黄化えそ病**では葉にモザイク、えそ斑点及び黄化等の症状を、果実にモザイク斑紋や奇形を生じて減収し、**CABYV**(和名未定)では中位葉の半分程度に退緑及び黄化症状が発生して減収する。いずれもキュウリ以外のウリ科作物でも発生する。媒介は、**退緑黄化病**では**タバココナジラミ**により、**黄化病**では**オンシツコナジラミ**による。**CABYV**の媒介虫は不明であるが、海外では**アブラムシ類**とされている。



退緑黄化病



黄化病



黄化えそ病



4. トマト黄化葉巻病 及び トマト黄化病

トマト黄化葉巻病は、**黄化葉巻ウイルス**(TYLCV: Tomato Yellow Leaf Curl Virus)の感染により引き起こされる病気で、症状は、先端部の葉が内側に巻く、葉縁が黄化、株の萎縮等で、**タバコナジラミ**によって媒介される。

トマト黄化病は、**トマト退緑ウイルス**(ToCV: Tomato chlorosis virus)の感染により引き起こされる病気で、症状は葉の一部の葉脈間が退緑及び黄化し、**生理障害の苦土(マグネシウム)欠乏の症状に類似し**、**タバコナジラミ**及び**オンシツコナジラミ**によって媒介される。

黄化葉巻病



黄化病



マグネシウム欠乏症



5. タバコナジラミ

9月中旬に実施した露地ナスの巡回調査では、1葉あたりの成虫数7.60頭(平年0.12頭)、寄生葉率59.6%(平年6.8%)と**発生量は平年比多かった**。

タバコナジラミは世界中に分布し、多くのバイオタイプが存在する。中でもバイオタイプQは**薬剤感受性が低く難防除害虫**であるので、**防虫ネット**や**黄色粘着板**及び**農薬**等を組み合わせた「**総合的害虫管理**」が有効となる。



幼虫



成虫

